

よてーね
-プキ-

おちこにうむ

R-18

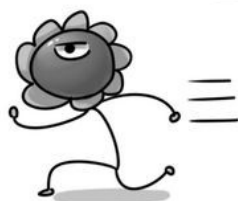




おちこにうむ

オテコレ

アキ



あらすじ

前回のオテコレ

「私、今日泊まりだから、あんた今夜はおばさんちに泊まりなさいね」と母に当日急に言い渡される僕。

数年ぶりに訪れた先は母の同級生であり、巨人族のおばさん(街の一部分なら手の平に乗せられる大きさ)の家だった！

適当に練習用の模型の街で遊ばれ、それなりに汗をかいだ僕ら。遠慮する僕を摘み上げておばさんは風呂場への扉をくぐったのであった。

一緒にお風呂

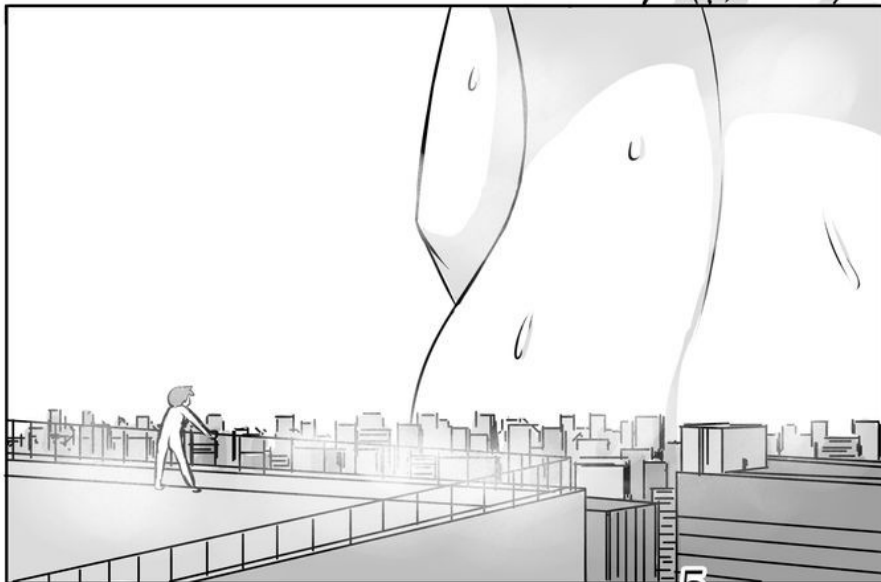


「はい、ちょっとここで待っててね」
指先に乗せた僕を器用に浴槽の縁の街に降ろすお婆さん。この街も先ほど遊んだ街同様、小人の街に慣れるためのレプリカだった。
なぜお風呂にこの街を作ったのかは謎だ。お風呂で遊ぶのかな？
そんな事を考えている間にお婆さんは扉の向こうに戻り、するすると服を脱ぎ始めたようだ。浴槽にはすでにお湯が張られており、浴室は蒸し暑く湯気のせいで天井も見えない。
降ろされたビルの屋上から周りを見渡せば、サイズこそ異常な大きさなだけで、浴室自体は普通の浴室となんら変わりはないかった。

それにしてもレプリカの街とは言え、素っ裸で放置されるのは抵抗がある。建物はしっかり中まで作られており、引っ越してもすぐに暮らせるレベルの再現度なのだ。
これで通りに人が溢れていたなら普通の街と見間違ってしまうだろう。ご丁寧に車や電車まで放置されていた。
誰も見てないが、思わず大事な所を隠し前かがみになる。
露出癖は無いが、このまま裸でウロウロしていたら何かに目覚めてしまいそうだ。
やがて、地響きを立てお婆さんが再び浴室に入ってきた。もちろん全裸で、申し訳程度にタオルで体を隠す。



湯気でよく見えないまま、お婆さんは椅子を引っ張りだしズシンと座り込む。とてつもない大きさの尻が降ろされた衝撃で街は揺さぶられ、手すりを掴まなければ立っていられなかった。
白いもやの向こうにお婆さんの背中が聳える。
そのままシャワーで頭と体を洗い出す様子を僕はずっと眺めていた。
そのスケールと湯気の濃さ、浴室の温度に当てられたせいなのか、温水が街に降り注ぐ中その現実離れをした光景を食い入るように見つめ続けた。



迫る密林

急に街に影が落ちる。ぼーっとしている間に体を洗い終わったお婆さんが立ち上がり、こちらへやってきたのだ。

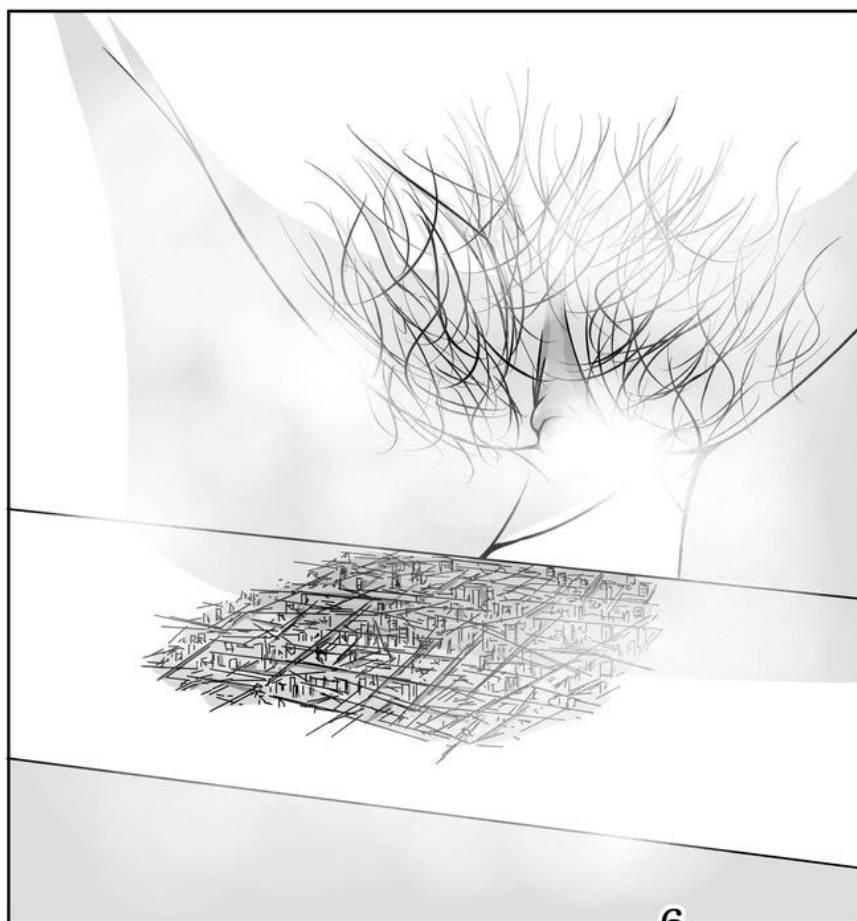
下から見上げるお婆さんは一段と迫力があつた。

本当に山のようなサイズの胸が視界を覆い尽くし、その谷間の間からキョトンとした顔でこちらを覗きこむお婆さん。

「タカくんどこかしら……」

そんな呟きさえ空気を振動させ、街を揺るがす程の音量だ。

その無防備さに、思わず前かがみにならざるを得なかった。



地響きと共に、湯気の向こうからとんでも無いものが近付いて来た。

お婆さんは街に接近しすぎたのだ。生まれたままの姿の股間が街の数百m手前まで迫っていた。黒々と生い茂る陰毛の森や、割れ目の中央でいやらしくぬらぬらと光る襷までがくっきりと見て取れる。

少し興奮しているのか、若干盛り上がったクリトリスが小山並の大きさになっている。

あの大きさからして、この街のどの高層ビルよりも巨大だろう。陰毛にしても全長が100mを切るものは少なく、1本でも街に落ちてきたら大災害は免れないだろう。

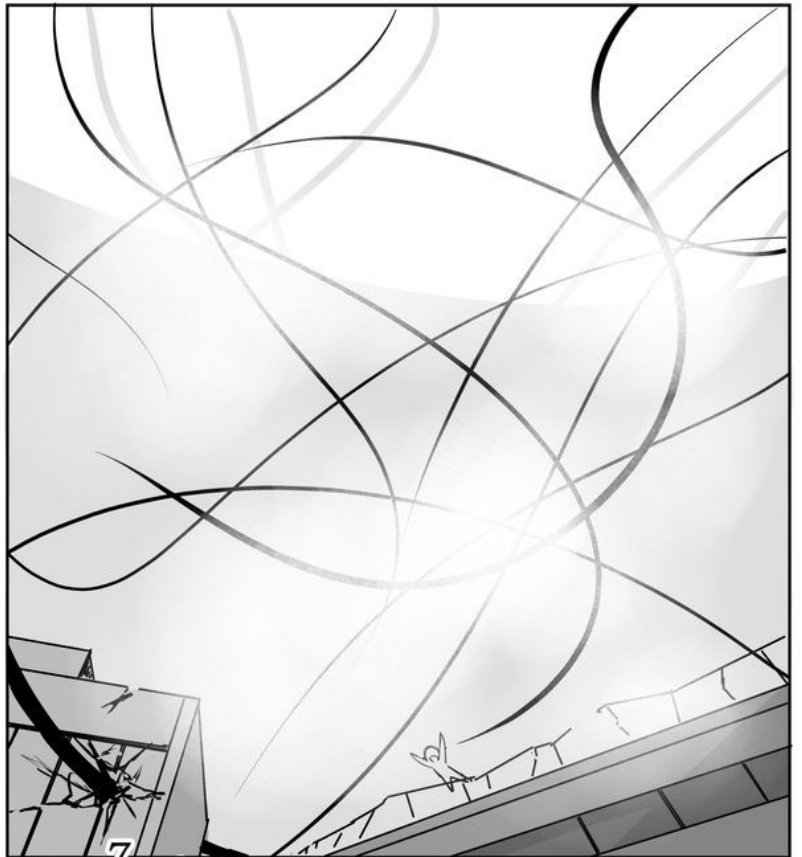
たまに実際の街をお婆さんが跨いで行くことがあるが、その時スカートの中から陰毛が落ちてこないことを祈ろう。

お婆さんの陰毛1本でも、人類にとっては破壊兵器なのだ。

蹂躪



轟音と共に、街の端に位置していたビルや民家が押し潰された。
「キャッ！ちょっとひんやりするわね」
甘ったるく、媚びたようなお婆さんの声が木霊する。
信じられないほど巨大なピンク色に充血した肉の芽が瓦礫の上に鎮座していた。
お婆さんはクリトリスを街に押し付けこのちっぽけな建物達を粉碎したのだ。絶対にわざとである。
「うーん、タカくんはどこかしら？ちょっとごちゃごちゃしてて見難いから、少しだけ更地にさせてね」
ニヤニヤ顔のお婆さんが目に浮かぶ。こっちは耳に装着した通信機で必死にお婆さんに呼びかけを行っていたが、「なにー？」「よく聞こえないーい」等と全てとぼけた返事が返ってきた。
腰を動かし、浴槽の縁に股間をグググッと押し付けるお婆さん。その動きに合わせ、超巨大クリトリスが建物を磨り潰す。
学校や住宅地を通過し、商店街もその巨体の下に轢き潰すお婆さんのクリトリス。体当たりされた高層ビルは瞬時に消し飛び、その破片も隔て無く地面に埋め込まれる。
上空からは大量の陰毛が襲いかかり、ビルを貫き、砕き、その強靱な毛により真ん中から真っ二つにされる高層ビルもあった。



街を跨ぐ

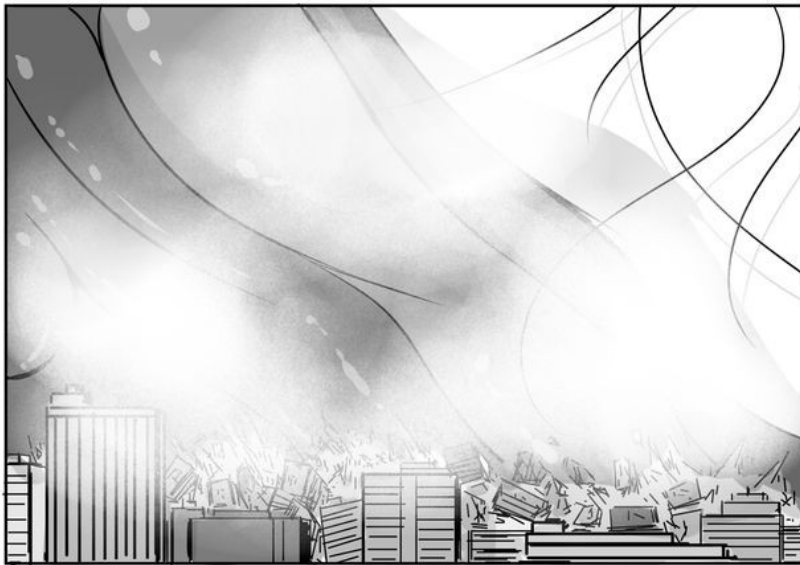
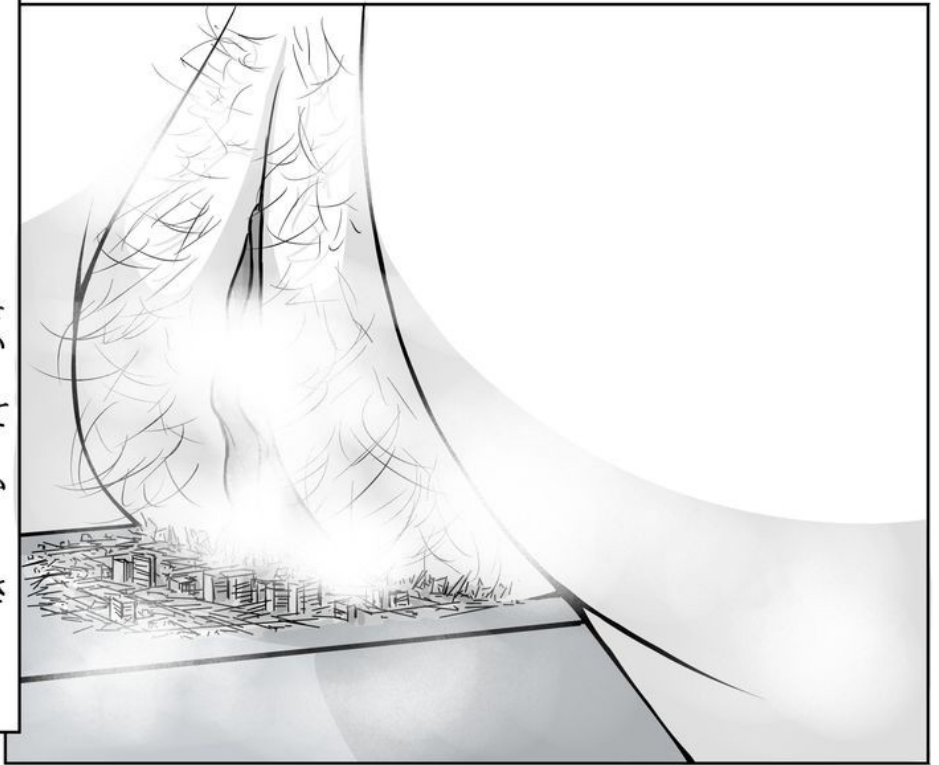
「なーんちゃって、ゴメンゴメン」
お婆さんの股間が街から遠ざかっていく。
跡には一部が廃墟と化した街が存在したが、お婆さんにとっては些細なことだった。
「まったく。冗談じゃないですよもう」
彼女のちょっとしたイタズラは人類にとっての大災害だ。
しかも性的なイタズラで街を破壊されたんじゃ、人類のプライドは粉々だろう。
恥ずかしげもなく股をおっ広げたまま、股間に付着した街の瓦礫を払うお婆さん。
「いいんですか？レプリカとはいえ、結構壊れちゃいましたよ。しかもちょっと生臭くなったし…」



「ちょっとー、そんな事無いわよ。しっかり洗ったんだから臭いわけではないでしょ！」
余計なことを言わなければよかったとつくづく思った。
お婆さんにイタズラをする口実を与えてしまったのだ。
たとえ、人間サイズであってもぶつといであろう太ももがうなりを上げながら上空に持ち上がり、縁の街の上空を通過する。
完全に街を跨ぐ形でお婆さんが聳え立ち、地上からの景色は股間が完全に覆い尽くしてしまった。
「もー、そんな事言うならタカくんが隅々まで洗ってね！はいどうぞ！」
そんな事は無理に決まっている。
街より広い恥丘、ビルより高い褄や大樹のような陰毛が生い茂るお婆さんの股間など、人間一人で洗うには何年もかかってしまう。
お婆さんにもそれは分かっているが、ただ僕を困らせて遊びたいだけなのだろう。
とりあえず満足するまで遊ばせるにしても、こっちにとっては命がけなんだけど……。
次第に熱気と臭気がきつくなってくる。やがて、街より巨大なお婆さんの股間が数百の建物を押し潰した。

街オナ

殴りつけるかのような衝撃に
なんとか耐え顔を上げると、
目の前には遥か上空まで続
く巨大肉壁が鎮座していた。
周囲はお婆さんの股間が放
つ熱により一層湯気は増し、
水滴が体中にまとわり付く。
更に超巨大女性器から発せ
られる若干の臭気がフェロモ
ンを乗せ、街中に渦巻いてい
た。
「あは、何だかプチプチしてて
ちょっと気持ちいいかも…」
お婆さんがもぞもぞ腰を動か
す度に地面に接触した襷や
陰毛が街を粉碎していく。
もしこれがきっかけで、お婆さ
さんが実際の街を玩具にする
のに目覚めたらどうしよう…。



おそらく人類に抵抗することなど
不可能だろう。ある日突然、お婆さ
んの気まぐれで街がすり潰される
のだ。小人の目線など気にすること
無く、お婆さんは性器を街にこすり
つけ、そこに住む人間ごとオナニー
の道具にしてしまう。
初めは目立つ高層ビルから、クリト
リスで突いて粉碎し、お次は広い
道路を沿って車や低層ビルをぐし
やぐしゃにしていく。
ある程度遊んだら街にぐっと性器を
押し付け、広範囲を一気に押し潰
す。腰を上げれば、そこにはくつきり
と股間の形が街に刻印されている。

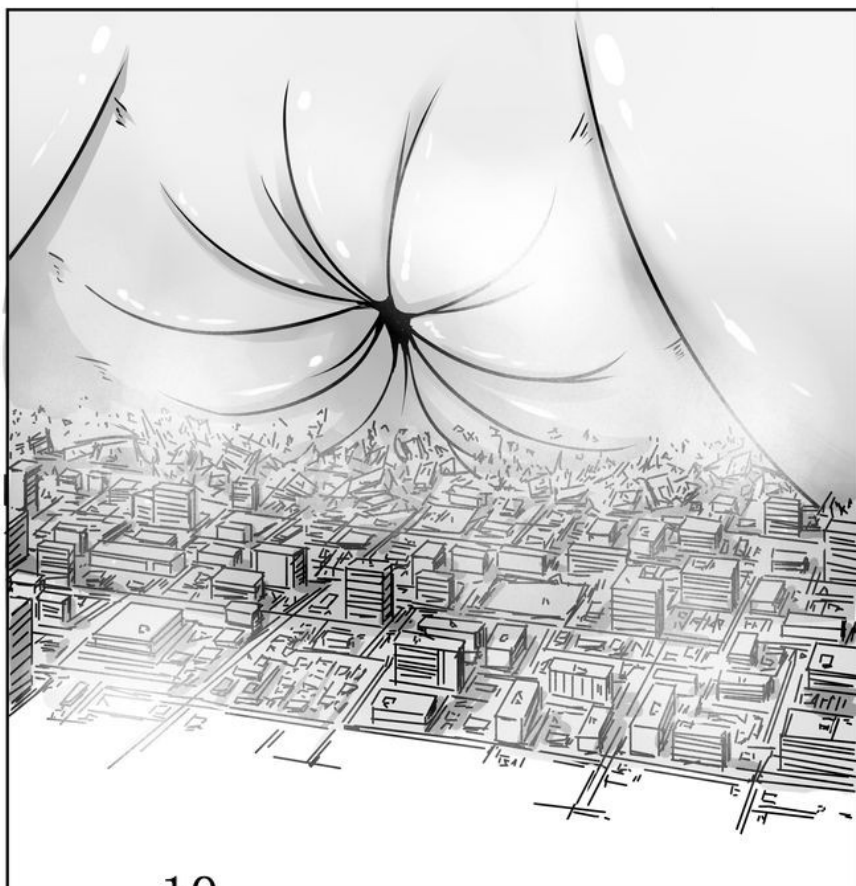
なんて妄想をしていたら、ほんのすぐ目の
前までズリズリと迫り来ていた超巨大性器。
「うわあああああああ！」
その迫力に思わず走って逃げるが、多分
お婆さんには僕の位置は分かっている、
押し潰さない程度に擦りつけているのだ
ろう。
逃げる間もつい後をチラチラ見てしまう。
こんなに至近距離で女性のあんな所を見
たこと無いし、脳裏に焼き付けようと思って
…。世界中探してもこんなに巨大なのは
お婆さん一人だけだと思うけど。



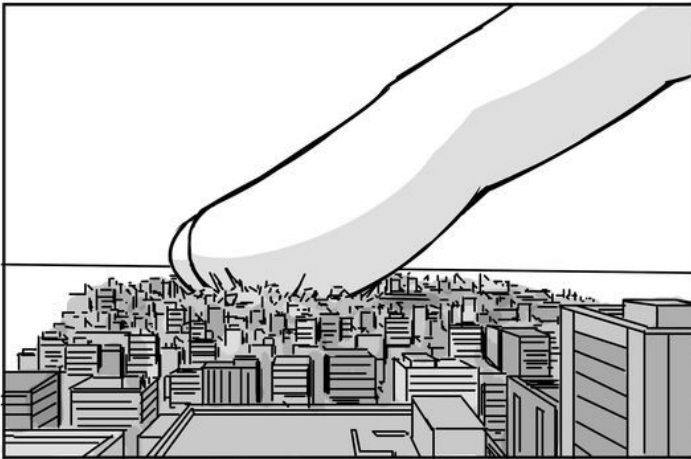
超巨大菊門



「ほらー、タカくん臭くないで
しょ？ちゃんと隅々まで綺麗
に洗ったんだから」
股間を擦り付けるのを止めたら
しく、背筋を伸ばし起き上がる
おばさん。
「こっちだってすごく綺麗で
しょ？見て見て」
再び尻が街に降ってくるが、次
に僕の目の前に現れたものは
超巨大な菊の門だった。
力を込めているのか、ヒクヒクと
動く肉の穴は直径300mくらい
あるのだろうか。
ムチムチとした肉の凹凸が動く
度に接触した建物が粉碎され
る。
おばさんが肛門を動かすだけ
で、人間の街など軽く捻り潰さ
れるのだ。
もし今、おばさんが放屁などし
たら…そんな事考えたくも無か
った。もしも普通の街で、おば
さんがしゃがんだ時にうっかり
放屁をしてしまったら……。

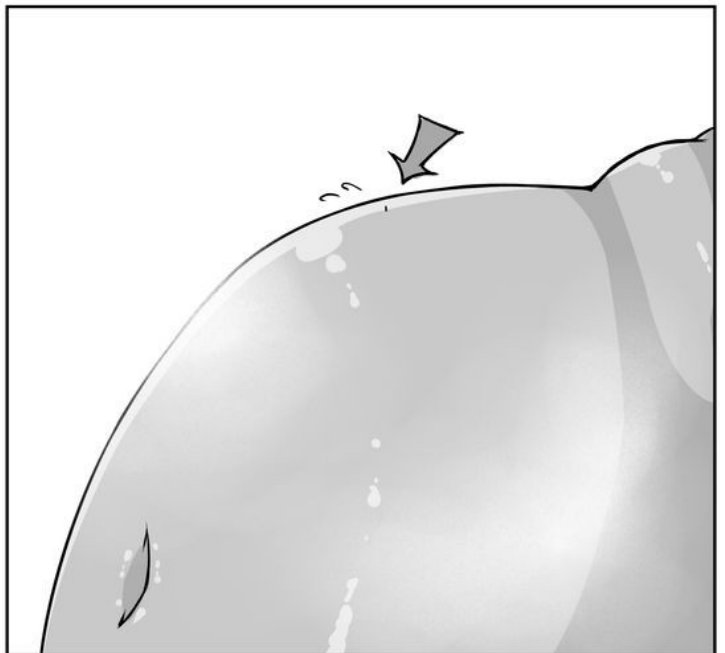


お風呂終了

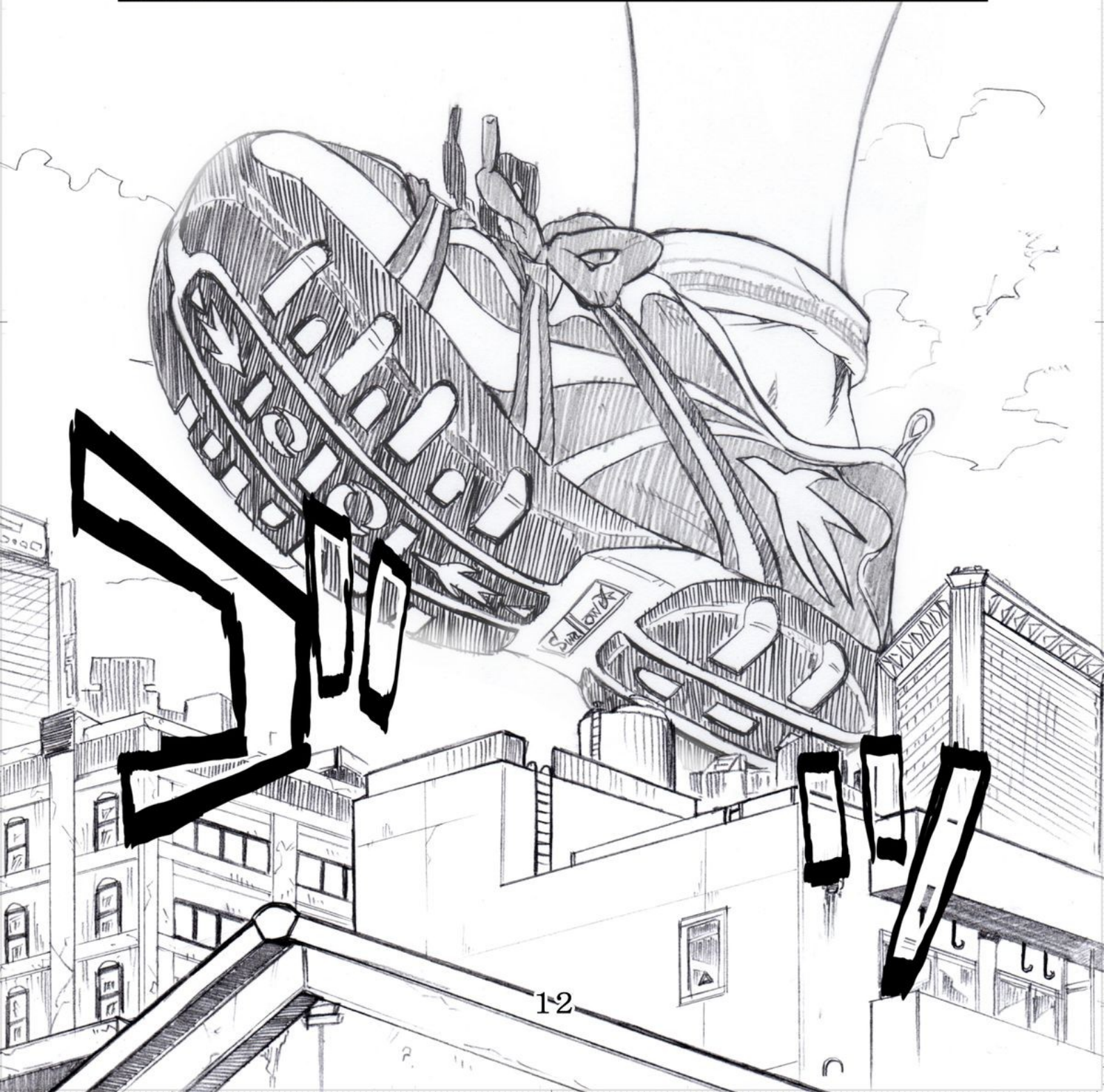
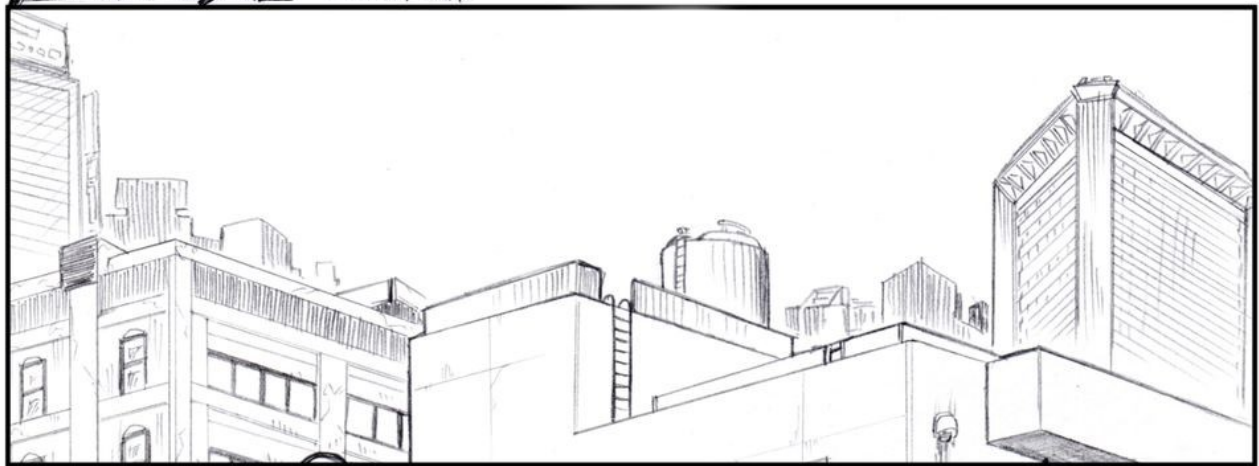


「はい、お遊び終わり～」
また妄想に耽ろうとしてた僕の耳に、お婆さんの声が入ってくる。
的確に伸ばされた指が僕がいる地点に降ろされ、僕はその濡れた表面にぺちゅとくっつけられた。
そのまま持ち上げられると眼下にお婆さんの尻で破壊しつくされた街が広がっていた。
無事な地域はほぼ無く、もはや浴槽の縁にこびり付いたゴミにしか見えない。

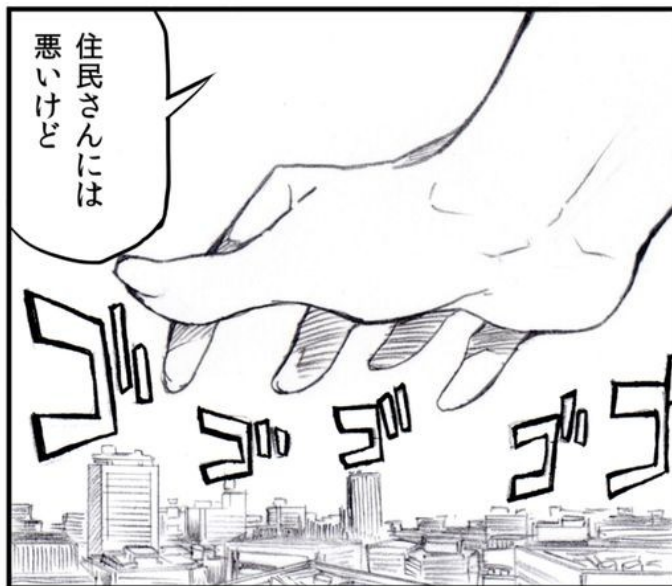
降ろされた先は弾力のあるピンク色の大地だった。そこら辺にある山より遥かに巨大なお婆さんの胸。その乳房の先からツンと上向きに突き出した乳首のその先に、僕はホコリのように付着していた。
「ここなら見つけやすくて安全でしょ？」
ぷにゅぷにゅする地面は歩きにくかったが、こんなに巨大で広ければ落ちる心配は無さそうだ。
声をかけられお婆さんの顔を見上げたが、背後に聳えるは地面と同じ色の乳輪の壁、更に上は肌色が続きそこから向こうは湯気で見えなかった。
なんとなく地面を両手でスリスリと触ってみる。これは…お婆さんの乳首を弄っている事になるのだろうか。
ぷにゅぷにゅに……。

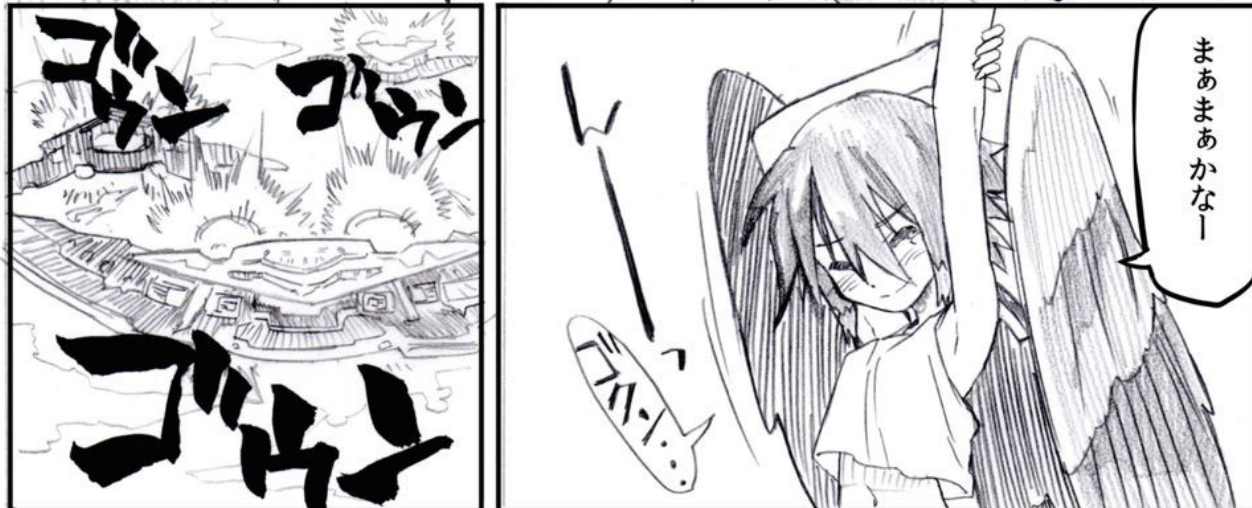


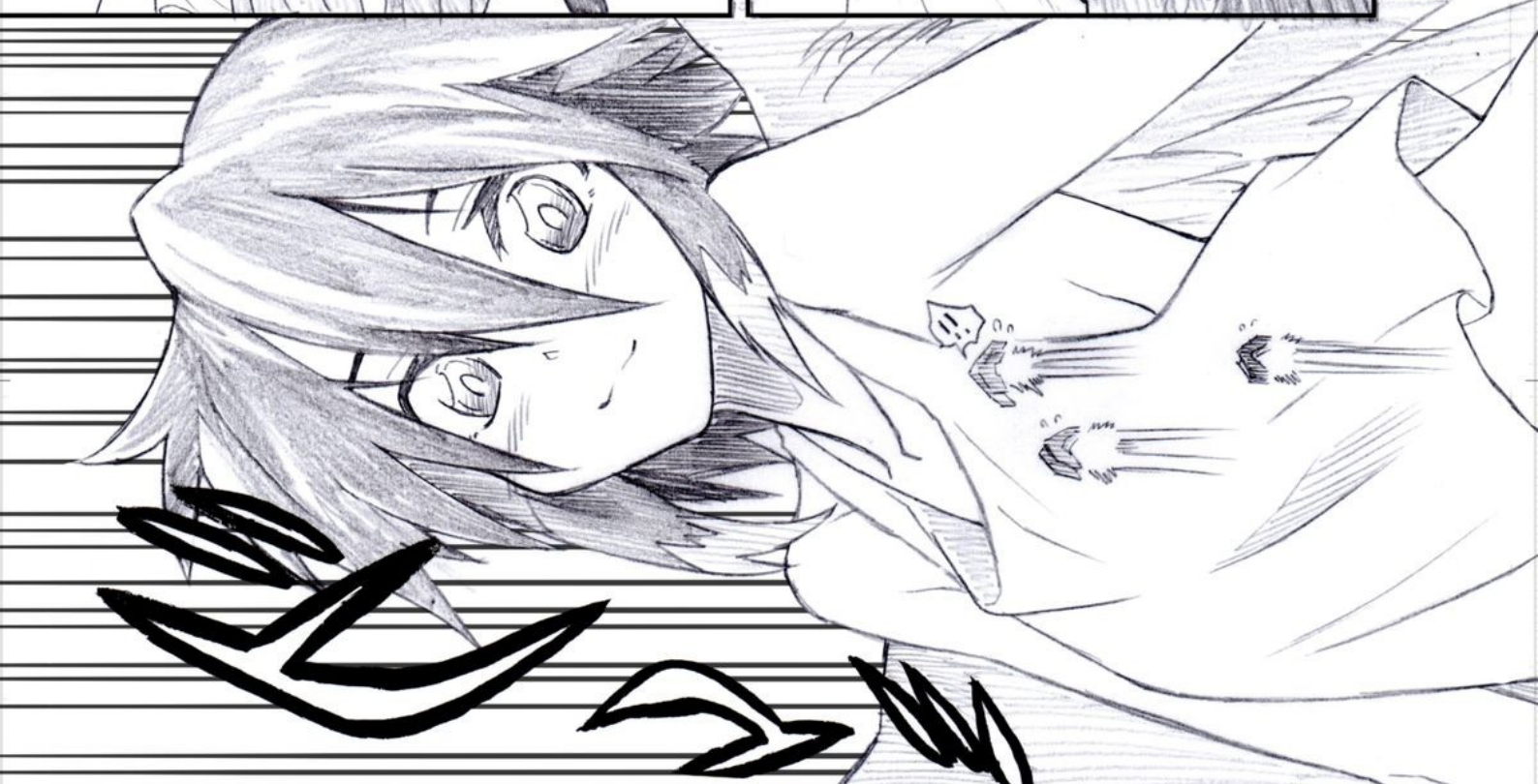
「こーら、何してるの？も一男の子なんだから」
これだけサイズ差があるけど、どうやらお見通しだったようだ。少し気まづくなつてごろんと寝っ転がる。
「……」
寝っ転がったら体全体でお婆さんの乳首を感じている事に気付き、下半身が元気になってくる。
「あらあら、お婆さんは何でも分かっちゃうんだから」
すでにリラックスモードで湯船に浸かっているお婆さん。
「お風呂から上がったら体を色々探検させてあげるから、今はそこで大人しくしててね」
ようやくゆっくり休めると思ったが、これからまだまだ長い夜が始まりそうだった。

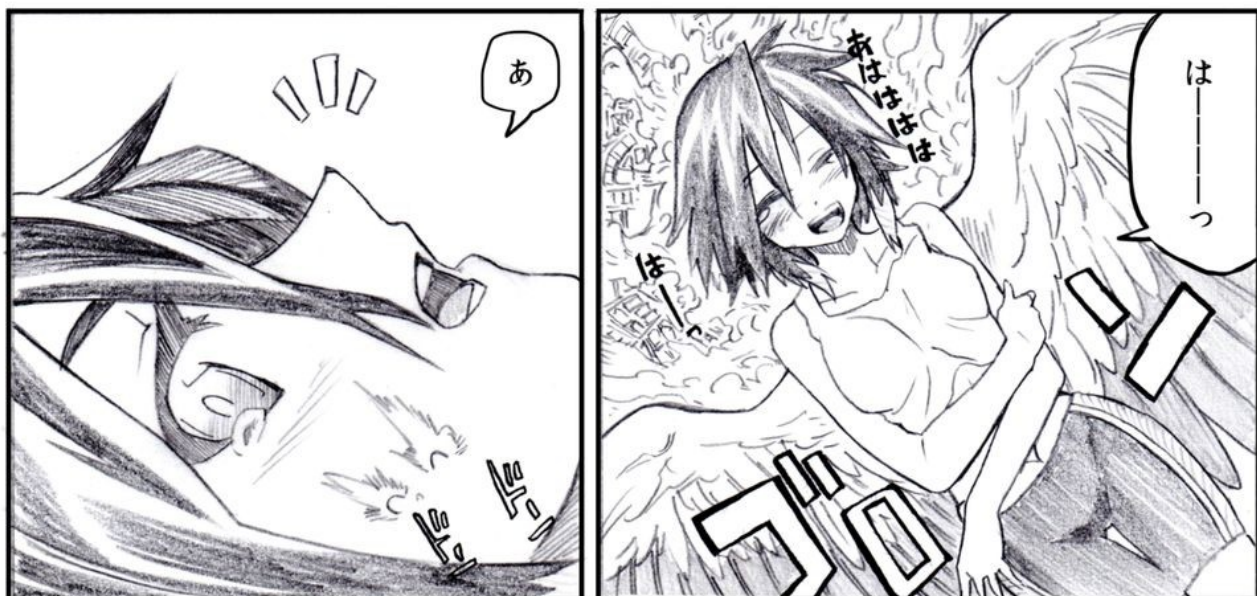
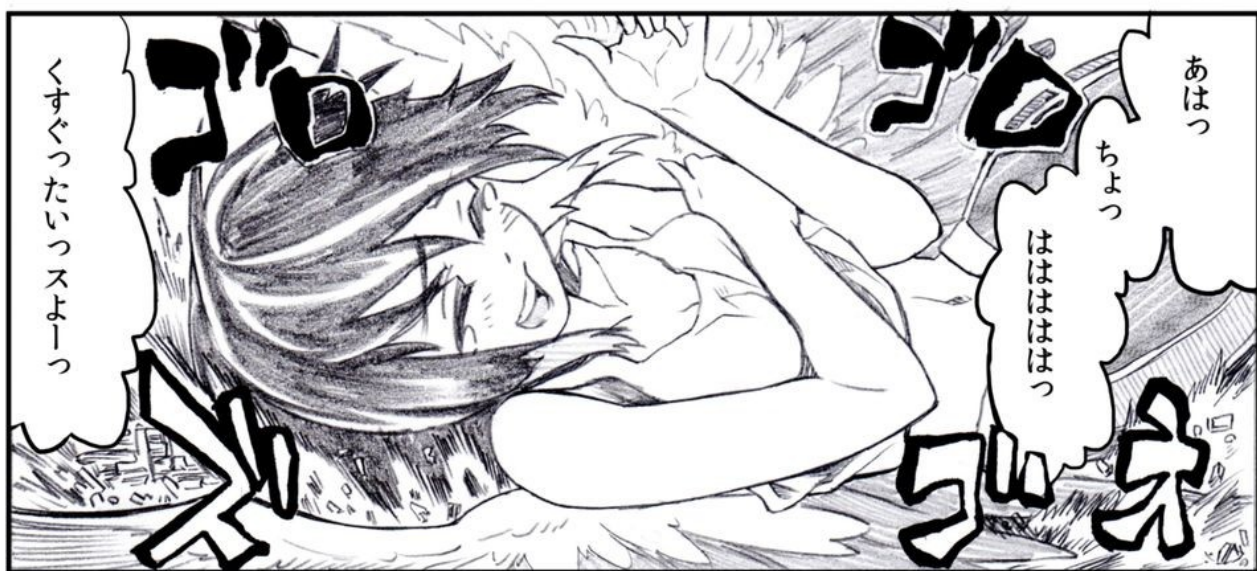


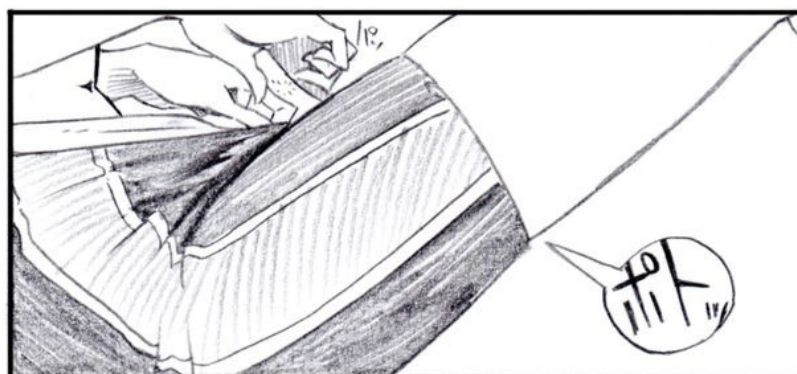


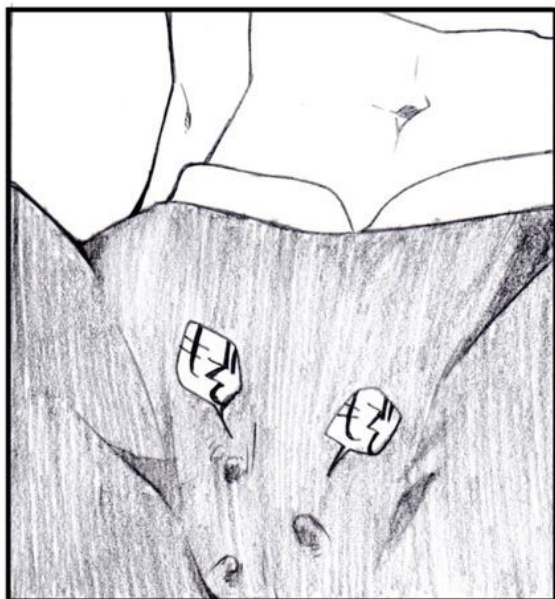








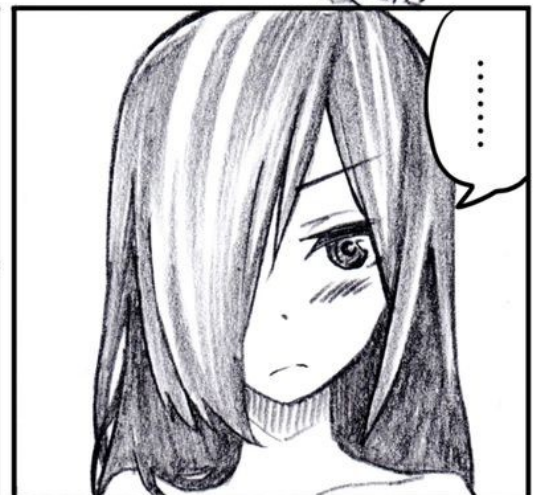
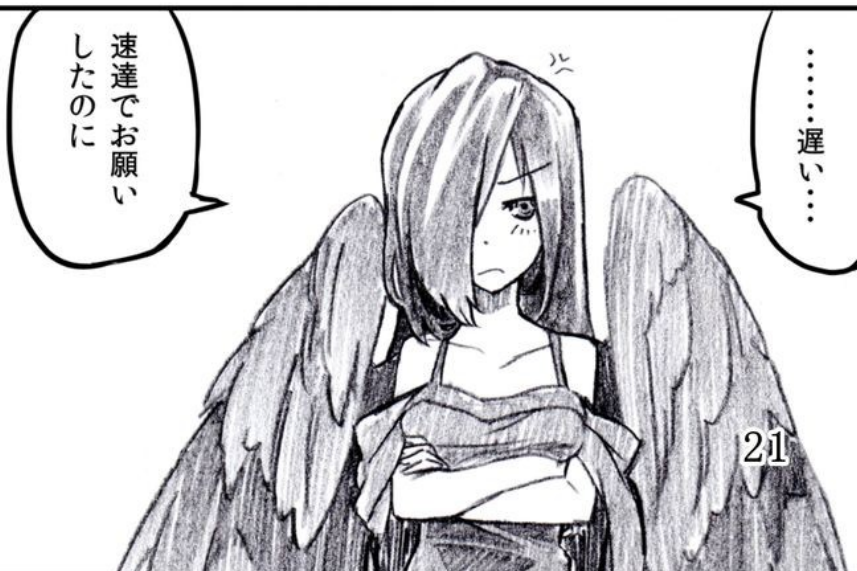








Special Thanks!... 水前寺様 . Jukes様













その日人類は思い出した
巨大少女に支配されていた恐怖を
鳥籠の中に囚われていた屈辱を
勝たなければ死ぬ。だが、
戦わなければ、勝てない。

進撃の巨人

attack on gino











設定とか。

ツウガキともいふ。

アスカ、2013.08.

宇宙戦闘員
ツバメちゃん。

黒羽
↓

白羽
↓

毛は赤 →
基本黒

髪は赤い
髪は赤い

あまのこちゃん
ないうど。
アツバメちゃん
なうど。

白羽の
ライン

快活な
スポーツ後輩
キャラ

スニーカー
ちゃんと設定
しよう。

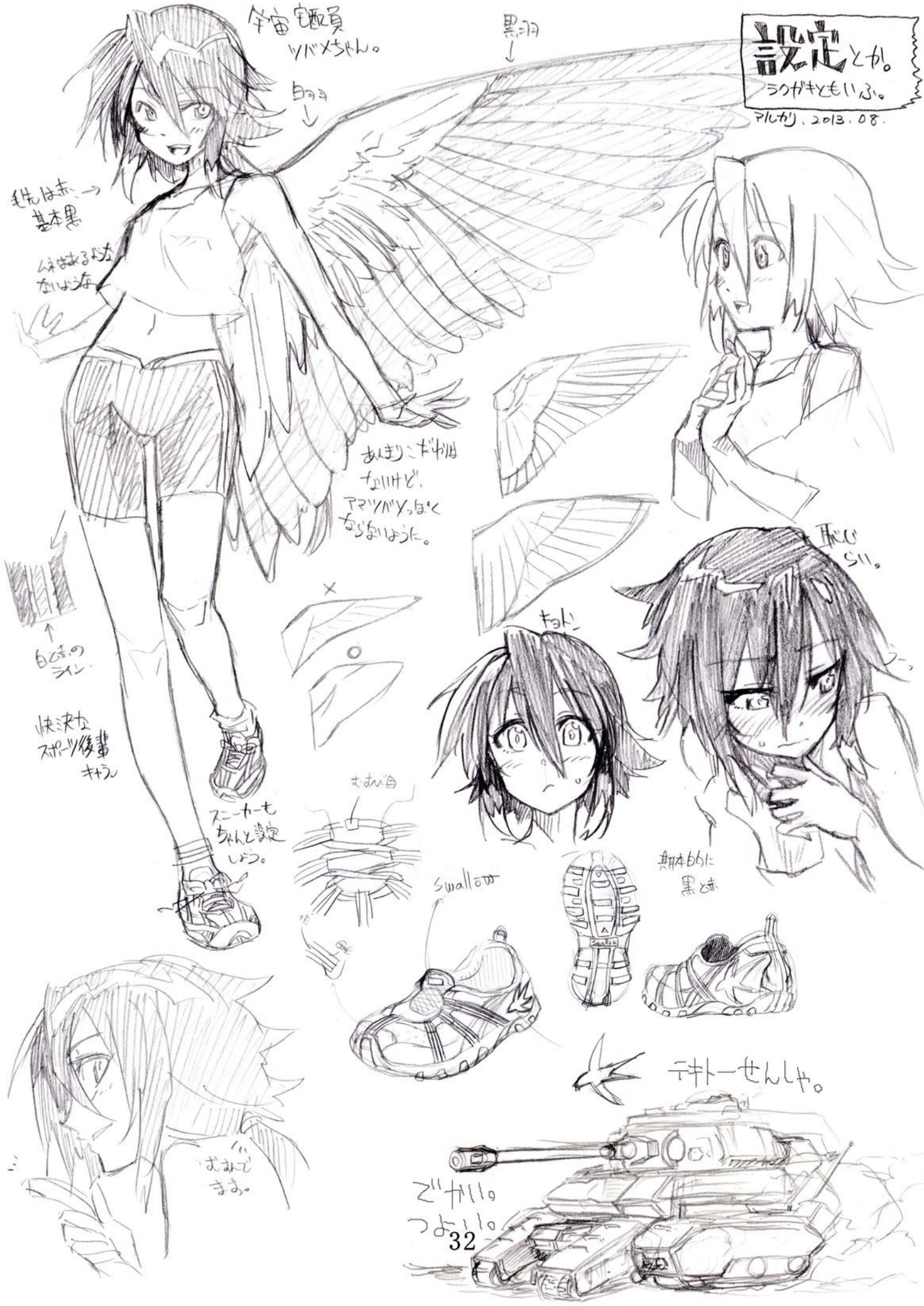
さあ白

Swallow

無印的に
黒色

デキシーせんしゃ。

2"カッポ
つよ
32



本当はこのくらいサイズで、快適で優しいスリッパ
と、はじかれ学者とのほのぼのものを描きたかたのどすが、
エロさがないうざわりとはした。そのうち描きたいぞうね。

Short Tale
of The Swallow.

2013.8.
©arukari
futin



おてこれ

サークル:おちこにうむ
代表 :寺田落子
ゲスト :アルカリ
:URU
:火山の楊
:カフカ
:XNR
:Hank
:Alloy Rabbit

落子ニコ生コミュ:co467317
落子PixivID:id=277281
代表連絡先:ragnarok1129@hotmail.com
発行日:2013年8月11日
無断転載・転売禁止
印刷:株式会社サングループ様

あとがき

落子(4～11P)

おばさんが前回よりスケールアップしてますがそっちの方がエロいですよね。

アルカリさん(12～21P、32～33P)

鳥娘漫画描かせていただきました！シャーペンでぐりぐり描くのは楽しいですね！
やっぱ僕はアナログ人間なんだなあと実感。みなさんも楽しんで頂けたら幸いです！
呼んでくださった方々に多謝！

URUさん(22～23P)

今回寺田さんの本に描かせてもらえるということで、嬉しいやら緊張するやらです…。
自分なりに頑張って描きましたので、どうか彼女らを愛でてやってください(。・ω・)ゞ

火山の楊さん(24～25P)

おちこにうむの新刊に参加できて嬉しいです。こちらとしては可愛い巨大少女に
エロいことをさせたくて、それに足フェチとして踏み潰されたくて…もし失礼なことを
言ったらすみません！

カフカさん(26～27P)

はじめまして、カフカと申します、よろしく願いいたします！
今度のチャンスは私にとって光栄なことと思います。本当に感謝します。
ゆんぞ様のエリザちゃん、優しくて可愛いですね。深い印象を持ちます。
ますますご健勝をお祈りいたします。それからよろしく願いいたします。

XNRさん(28～29P)

私は落子さんの為にほむらちゃんを描くのが好きです。私の作品が前回よりも良くなってる
事を願います。ありがとうございました。

Hankさん(30P)

おちこさんの同人のゲストになる事は名誉です。私の一番の絵を描きたかった。
お気に入って貰ったら嬉しいです。絵のスキルを向上させ続けて、
また一緒に描けるのを楽しみにしています。

Alloy Rabbit(31P)

同人に私の作品を載せる機会をいただき、嬉しく思っています。
将来的に、西洋と東洋のコミュニティがもっと一緒に盛り上げられることを願っています。

Ochikō's Collection -Petit-

Ochikonium

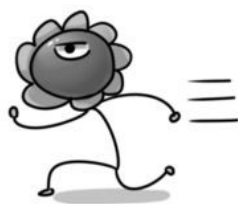
R-18





Ochikonium
Ochiko Collection

Petit



Summary



Together in the Bath



"Okay, wait right here a moment." Auntie carefully drops me in the city near the edge of the bath.

This city is similar to the one we played in earlier, and is a replica so accurate people could probably live in it.

Why she built this city in the bathroom is a mystery to me. Maybe to play with a city in the bathtub?

While I was thinking about it, Auntie went back through the door. It seems she started to take off her clothes. The hot water is already filling the tub, and I can't even see the ceiling through the steam.

I look around from the top of the building where I was dropped. It looks no different from a normal bathroom aside from everything being ridiculously huge.

Even if it's just a replica, I'm still uneasy about being naked.

The level of detail in the buildings is so high, and they are even furnished on the inside. People could easily move into the city right now.

Once the streets are crowded with people, the place might look like a normal city.

She didn't forget the cars and trains, either.

Nobody is looking, but I instinctively lean forward to cover my crotch.

I'm no exhibitionist, but if I keep going around naked it might awaken something.

Eventually, the ground trembles as Auntie comes back into the bathroom.

She's naked of course, with only a towel to hide her body.



I can't see well through the steam everywhere. Auntie pulls a stool and makes a thunderous sound as she sits on it.

I hold on to a handrail to keep my footing while the impact of her absurdly huge butt shakes the city. Auntie's back towers beyond the white haze.

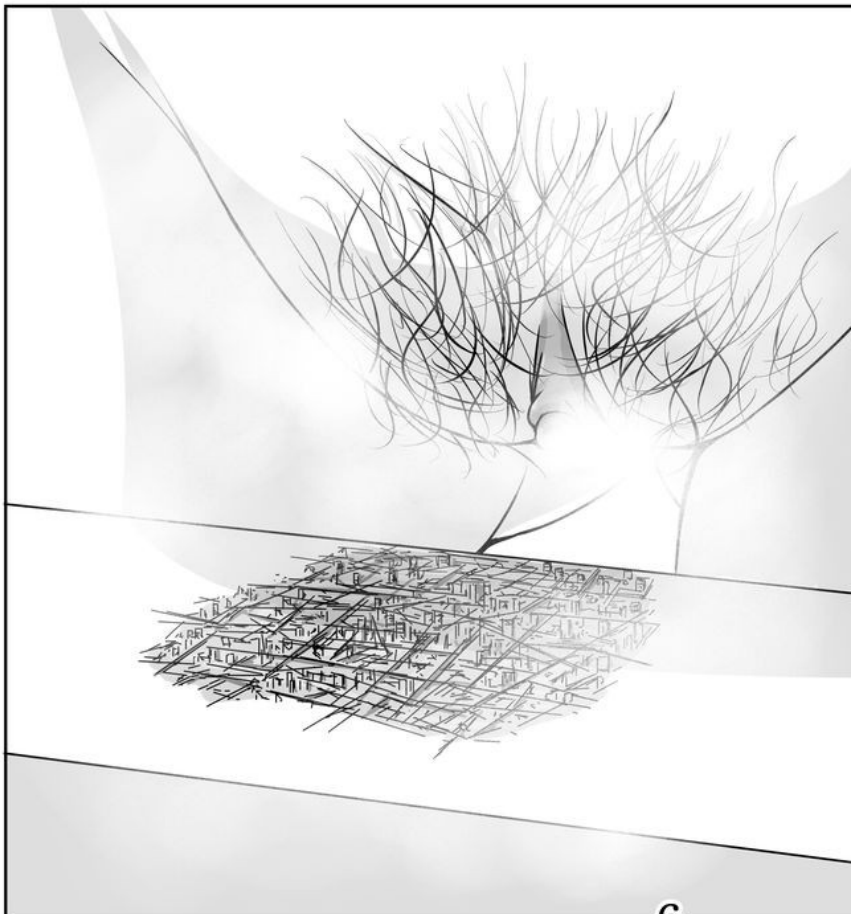
I keep looking as she washes her head and the rest of her body with the shower.

Probably because of the bathroom's temperature and the current scale and density of the stream, water rains down over the city as I devour the surreal scene before my eyes.



The Approaching Jungle

A shadow suddenly covers the city.
While I was daydreaming, Auntie finished washing herself, stood up, and turned in my direction.
It is so intense seeing Auntie from such a low angle.
Her mountainous breasts reduce her field of vision. I'm enchanted by her face looking down between her cleavage.
"Taka-kun, where are you...?"
This city would tremble at the slightest breeze, so the volume of her voice causes it to quake.
Being so defenseless, all I can do is unintentionally lean forward.



Along with multiple earthquakes occurring, something unthinkable is approaching through the steam.
Auntie is coming really close to the city.
The great birthing creature between her thighs is just a few hundred meters above the city.
I can clearly observe the abundant forest of her thick, dark pubic hair, and the slimy lewd crack in the center with its shiny creases.
She must be a little excited, because her clitoris has swelled to the size of the average mountain.
With that kind of size, it's probably bigger than any skyscraper in the city.
If cutting a 100m chunk of her pubic hair away counts as just a little, then a single piece falling into the city would be a total disaster.
Auntie occasionally walks over the real city, so I really hope her pubic hair doesn't fall from her skirt when she does.
Even a single strand would be a weapon of mass destruction for mankind.

Overrun



A thunderous roaring comes from the edge of the city as buildings and houses are being crushed.

"Kya! This is so cold."

Auntie's sweet and delicate voice echoes.

It is unbelievable to see that huge pink erect meat enshrined over the ruins.

Auntie is pushing her clitoris into the city, pulverizing the small buildings over by it.

She's really doing it on purpose!

"Hmm, where could you be, Taka-kun? It's a little tough to see you in all this, so I'll clear it out a little, okay?"

I can imagine Auntie's face grinning in my head.

Auntie has a communication device attached to her ear so she can contact me, but the only responses I get from her are things such as "What?" or "I can't hear you~".

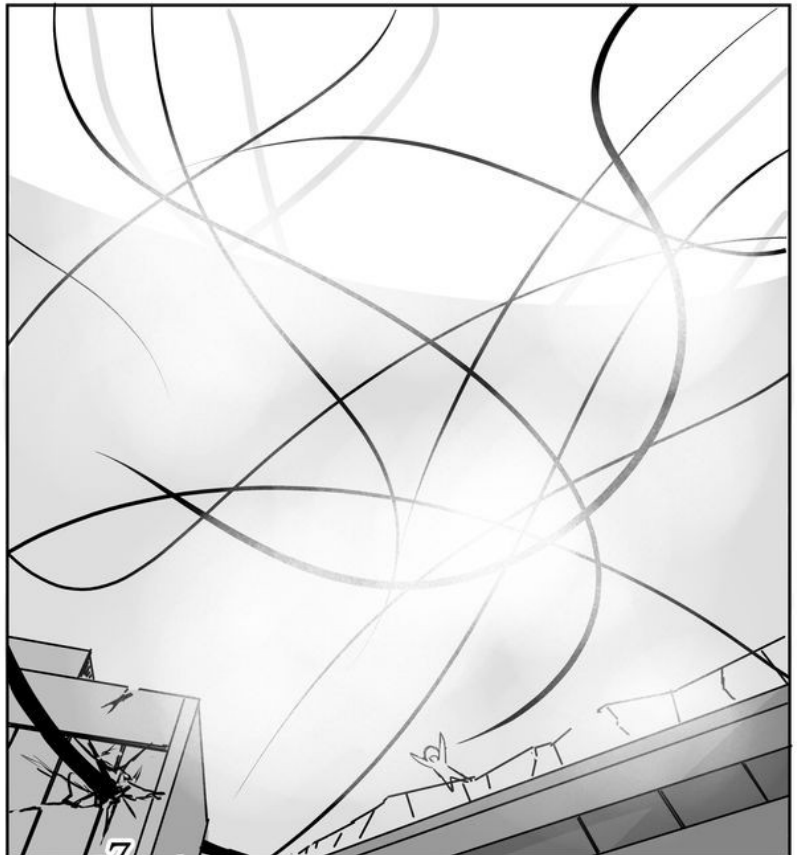
She moves her waist and firmly presses her crotch on to the edge of the bath.

Her massive clitoris grinds the buildings away as she moves her waist.

Passing through the residential and school areas, the massive body then heads over to the shopping district and crushes it.

The skyscrapers that are rammed in vanish instantly; not a single fragment is able to fly away as the buildings are pressed against the ground.

A great number of pubic hairs come from the sky, piercing and crushing buildings; those powerful hairs were even cutting some of the skyscrapers in half from their centers.



Stepping Over the City

"Just kidding, sorry~"

Auntie's groin begins to pull away from the city.

The ruins were once a part of this abandoned city that was destroyed, but it was a trivial matter for Auntie.

"Geez... This isn't a laughing matter!"

Her little mischievous pranks could be catastrophic for mankind.

She would probably even crush mankind's pride with her lewd behavior, without even destroying a city. With her crotch showing wide open without any shame, Auntie brushed off some of the city rumble stuck to her groin.

"Is this really okay? Even if it's just a replica, you destroyed a good amount of it. There's also a slight fishy smell..."



"Hey! There's no such thing! I made sure to wash it, so it shouldn't smell!"

Maybe if I hadn't said anything about it, we could continue on without any issue.

I try giving some excuses that I was teasing her about it.

Her thighs would be thick, even if she was human-sized; one of them raises and roars through the sky as it passes over the city.

Auntie's shadow completely covers the city as she passes over; her crotch passing through the sky also completely covers it.

"Goodness. If you're going to say that, maybe you should check every corner of it! Here, by all means!"

I can't believe she's doing such an unreasonable thing.

Her pubic mound is larger than the city, the creases deeper than buildings are tall, and all the abundant pubic hair growing on Auntie's groin... How many years would it take for a single human to wash it?

She knows this, too, so she probably only wants to have fun troubling me.

For the time being, even if she's just playing with me until she's satisfied, my life is on the line here...

The heat and stench gradually become more intense.

Eventually, the more than city-sized crotch flattens hundreds of buildings.

City Masturbation

I somehow endure the impact from Auntie's groin, and when I look up I can only see a giant wall of flesh continuing endlessly into the sky sitting in front of me.

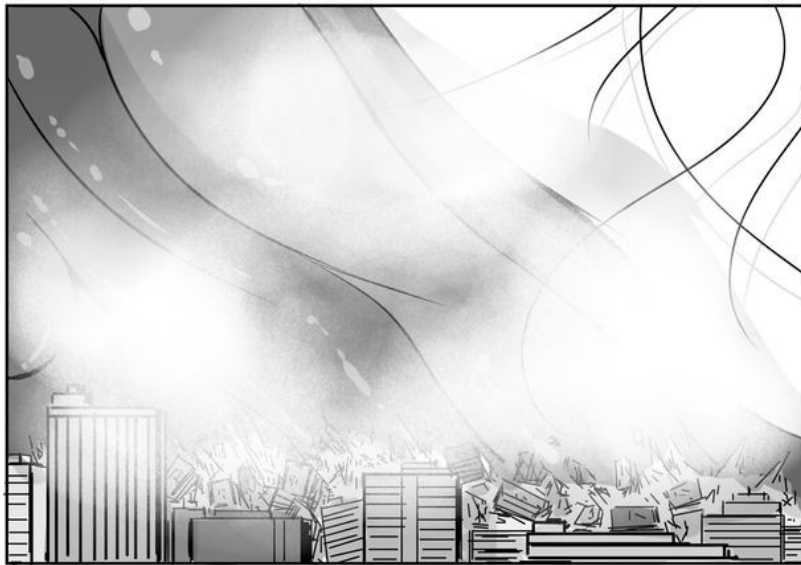
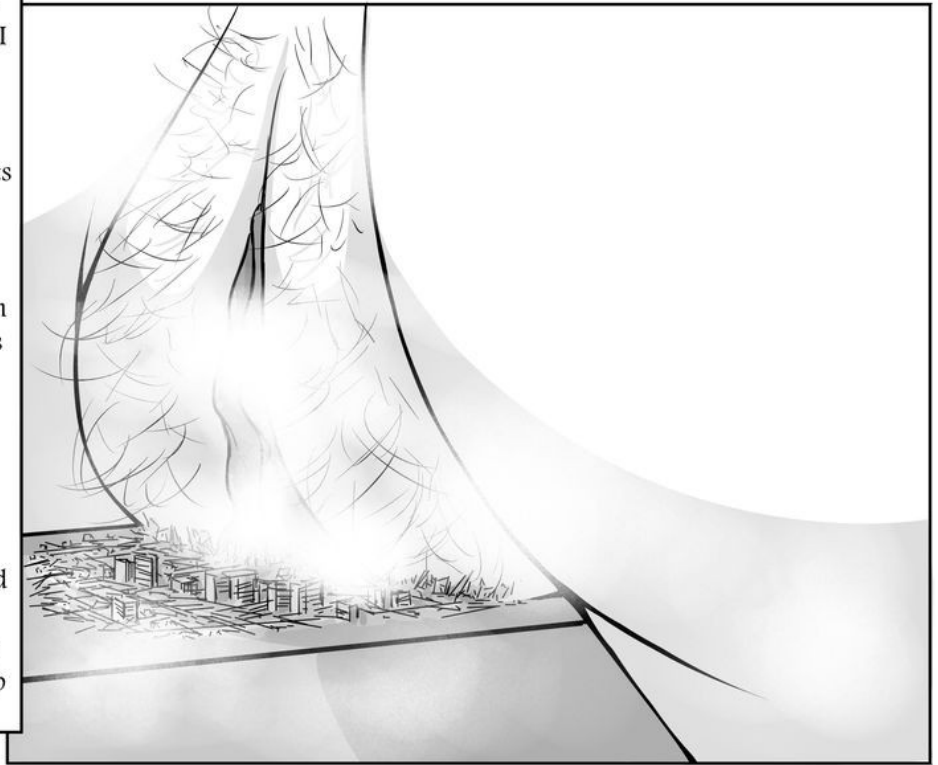
A heat wave from Auntie's groin hits me, and the steam around it increases; drops of water form, sticking to my body.

Another wave of smell coming from the gigantic female genitalia carries her pheromone and whirls about the city.

"Haha, the little bursts feel kind of nice..."

Every time Auntie twists her waist against the ground, the city is further demolished by her labia and pubic hair.

Supposing Auntie used the real city as a toy, what could be done to snap her out of it...?



I wonder if Mankind would start a resistance against her.

Suddenly, on a certain day, Auntie decides to pulverize the city on a whim.

Without caring about the smaller humans' situations, Auntie rubs her crotch against the city, using the people who live there as her personal masturbation tools.

First, since the building are standing high, they would be hit and crushed by the clitoris, then the cars and smaller buildings along the wide roads will crumble.

After playing for a while, she rubs her genitals firmly against the city, crushing a larger portion in a single pass.

When she finally gets up, a distinctive shape is carved where the city once was.

As I am daydreaming, the same thing is happening in front me, and her gigantic genitalia was sliding in my direction.

"Aaaaaaaargh!"

I start to instinctively run from its amazing force, but Auntie probably knows my current position, and I wonder if she will avoid rubbing against this certain part that hasn't been crushed.

While I am running away, I glance back for just a moment.

I've never seen the female part at such very close range, so I try to burn the view into my memory...

Even if we search all around the world, it's almost certain Auntie is the only person that has such huge body part.



Gigantic Anus



"See, Taka-kun, it doesn't smell, right? Because I properly washed every part." When it seems she is done rubbing her groin, Auntie straightens and stands up.

"This part is also clean, right? Here, look!"

Her ass sits on the city again, but this time I see a gigantic anus in front of me.

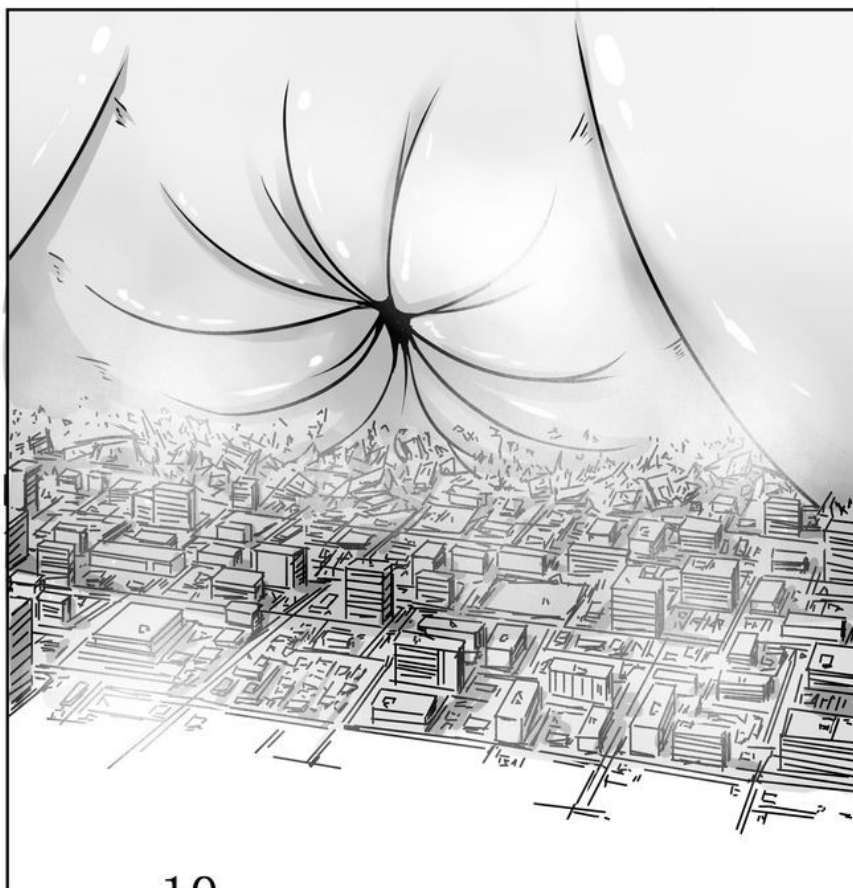
I wonder if she puts any strength into it. The twitching flesh hole has a diameter of about 300m.

Buildings near it are destroyed every time they get touched by the plump, undulating fleshy movements.

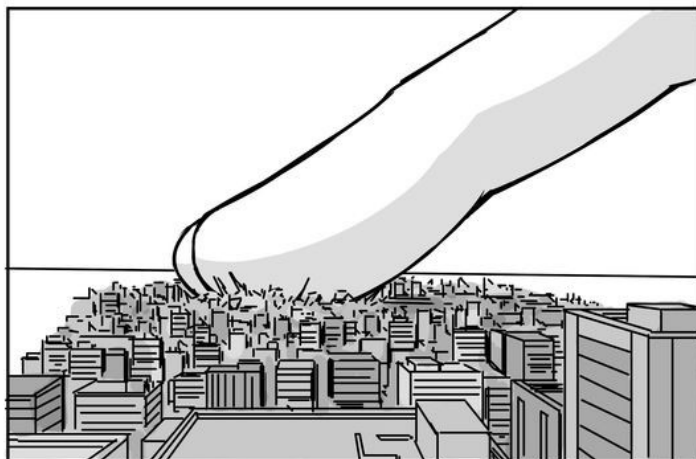
With only the movements of Auntie's anus, things like mankind's cities can easily be crushed to nothing.

If Auntie did anything right now, such as unleashing a fart... I don't want to think of such a thing.

If Auntie was squatting down over normal city, and she accidentally let out a fart...



Bathing Comes to an End



"Okay, finished playing~"

Once again, as I am absorbed in my delusions, Auntie's voice comes to my ears.

To be more accurate, she puts her finger around where I am, and I get stuck onto its wet surface. As I am lifted, I can see the city's destruction spreading wider by Auntie's butt.

There are no safe zones anymore, and all that is left is mostly a dust stain on the bathtub's edge.

I am dropped on to a vast, bouncy pink surface. This place is Auntie's giant breast, larger than any far away mountain.

The nipple is standing out, erect, and I am probably just mere dust clinging on it.

"Don't you agree it's easier to find you over here?"

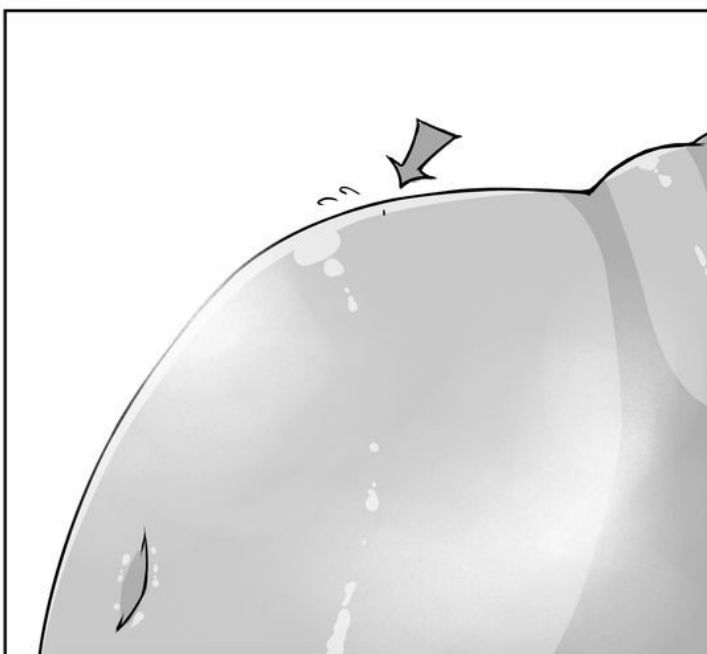
It becomes harder to walk around as the surface is bouncing, but it seems unlikely that I would fall off of this huge surface.

I look up at Auntie's face to call out, but the ground far away is still the same areola's color, and if I try to look further up, the flesh colored ground still continues until I can't see anything through the steam.

Somehow, I want to try rubbing the surface with my hands.

Could it be... that I am groping Auntie's nipple?

Grope groove ...



"Hey, what are you doing? Gosh, just because you're a boy..."

Even though there is a huge difference in size, she seems to be able to know what I am doing.

It has become a little awkward, so I roll over and lie down.

"..."

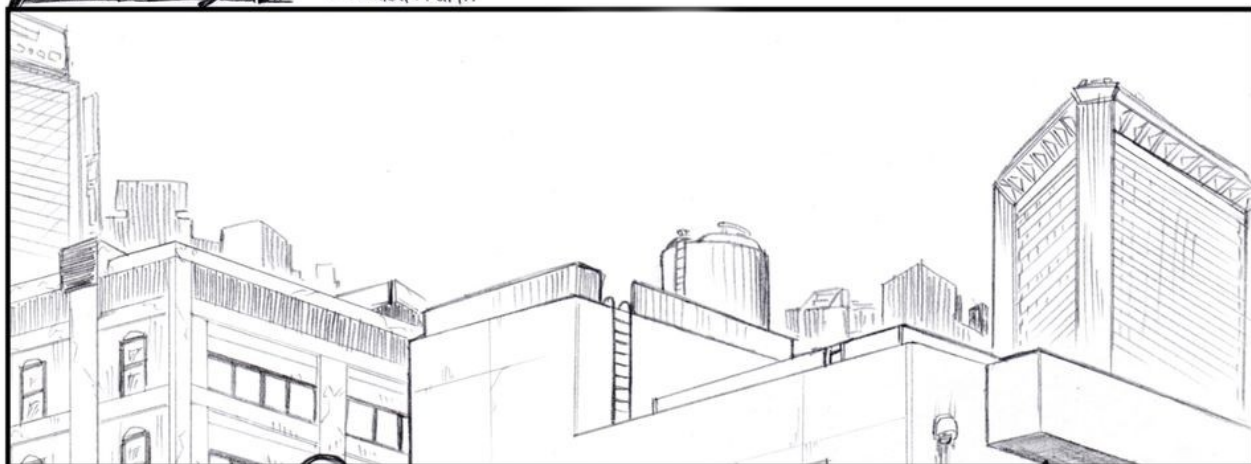
As I lie down, I become aware that my whole body is feeling Auntie's nipple, and my lower body becomes energetic.

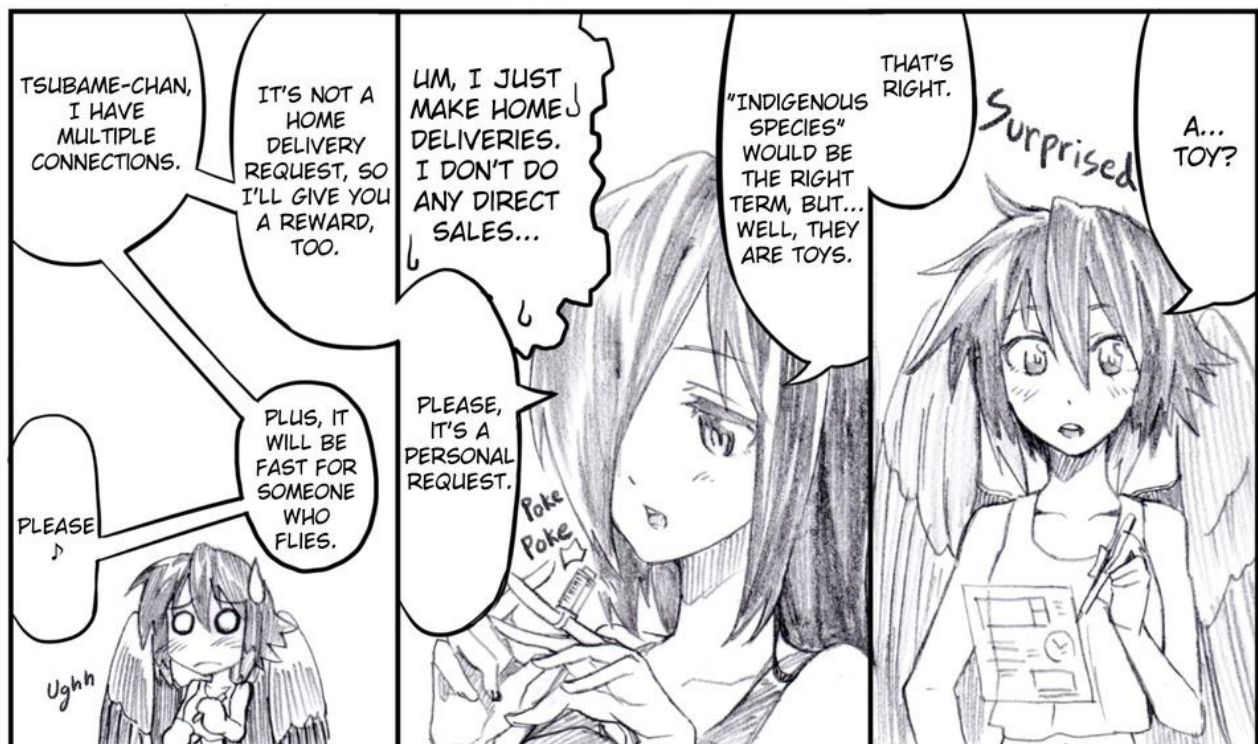
"Oh goodness, it's because Auntie is able to know everything."

Auntie is already relaxing as she soaks herself in the bathtub.

"Since I'm going to let you explore my whole body after we get out of the bath, just stay calm for now, okay?"

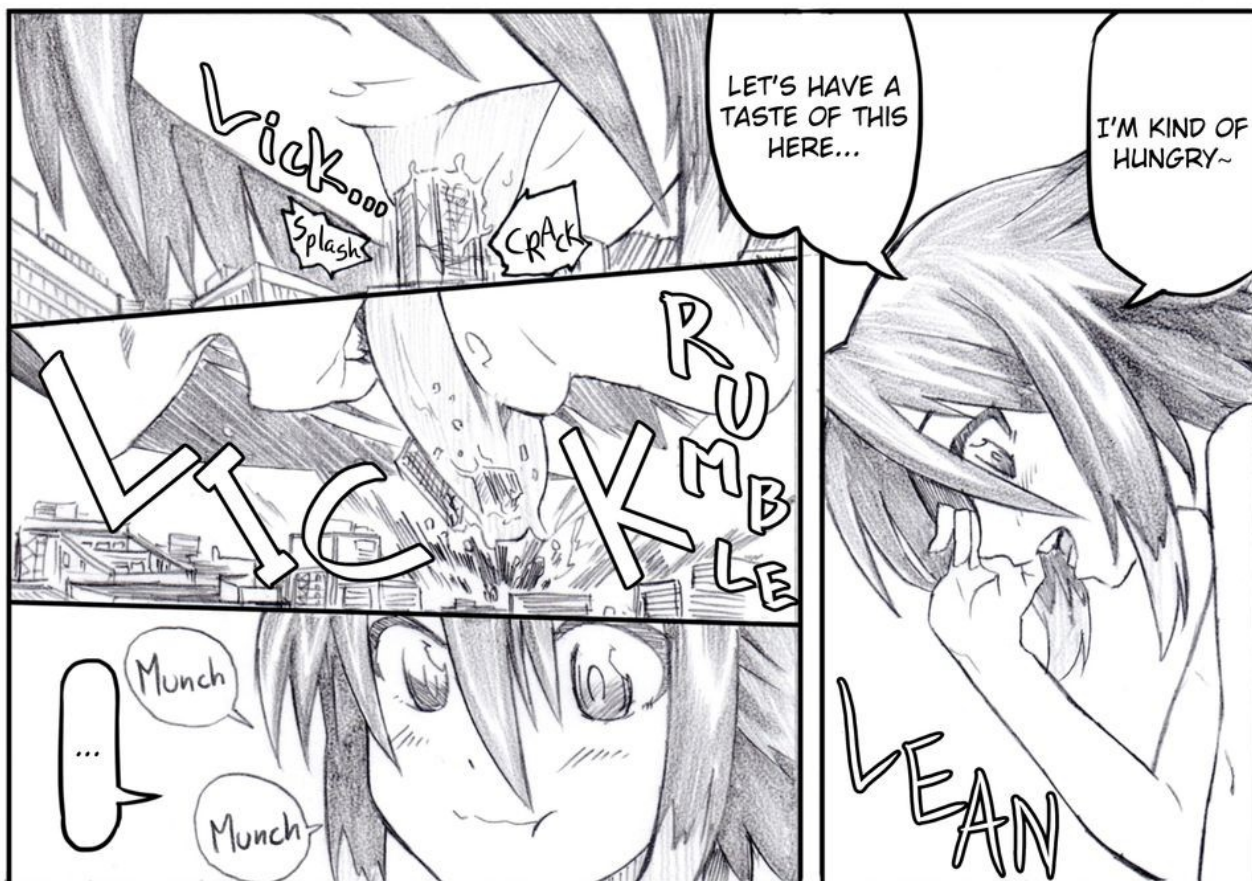
I thought I could finally rest a little, but it seems this is only the start of a long night.





↑ Skyscraper attached to ring.





ALRIGHT.

OH? DOES
MY ARMPIT
INTEREST
YOU?

WAH!

Pow
Pow
Pow

WHOOOSH

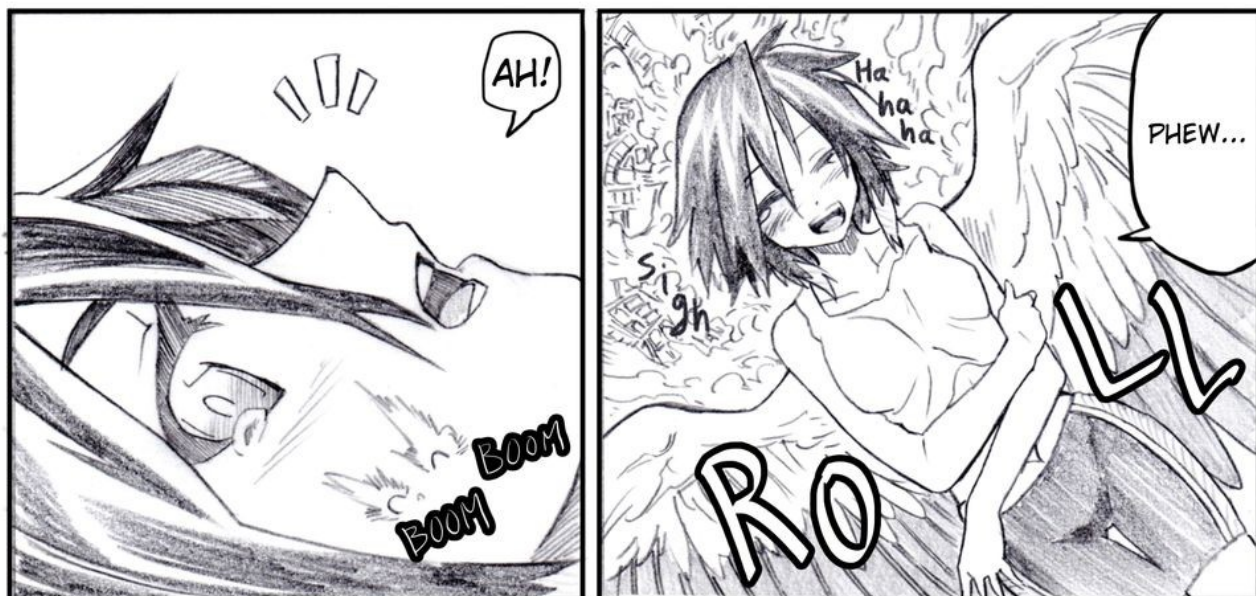
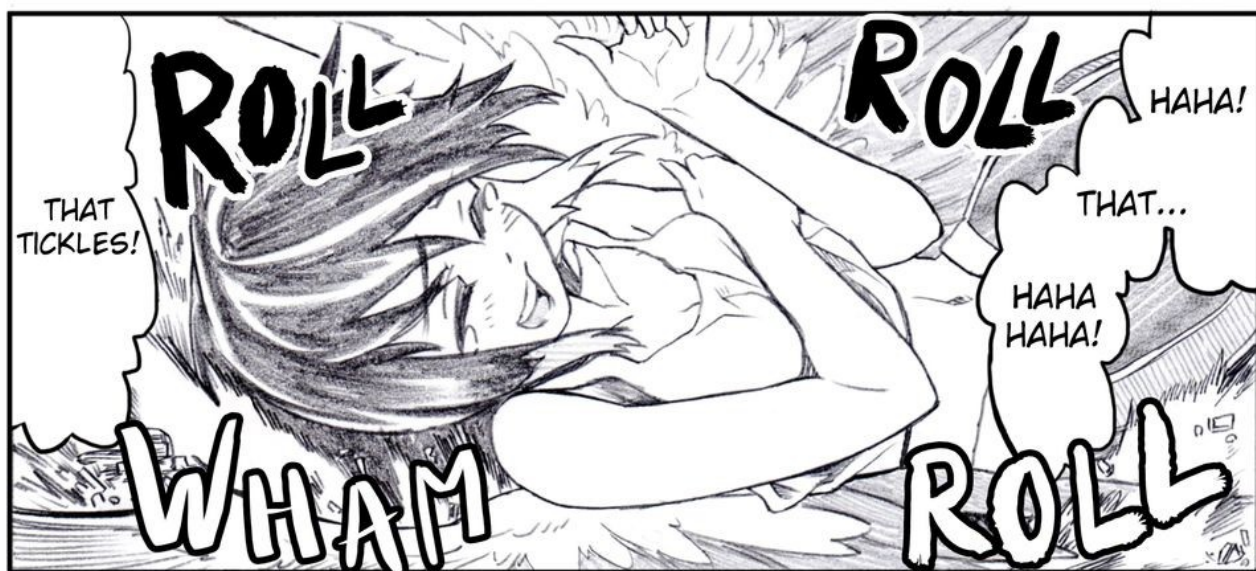
R
I
T
S
E

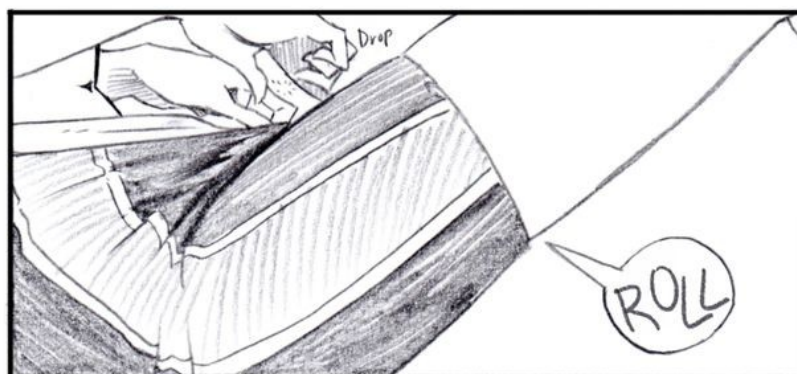
I'LL GIVE
YOU A
REWARD
SINCE YOU
TRIED
YOUR
BEST.

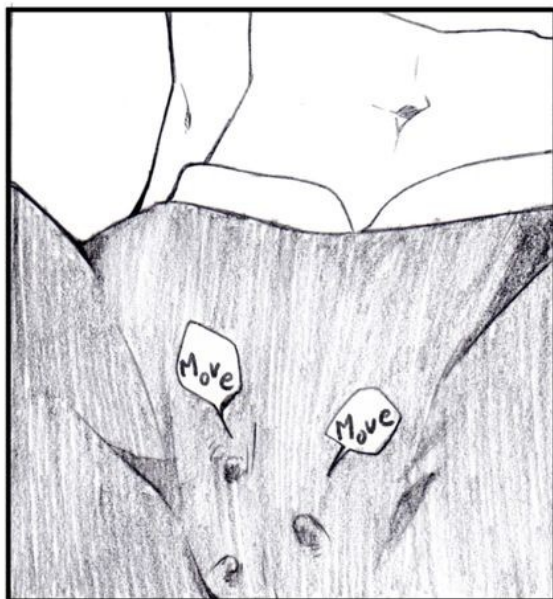
I'M
CONFIDENT
IN MY
SPEED!

HE
HEE!

RUMBLE











Special Thanks! ... Mr. Suizenji, Mr. Jukes

I EVEN
ASKED FOR
AN EXPRESS
DELIVERY
TOO.

...
SO
SLOW...

.....

Mankind remembers that day.
The terror of the giant girl ruling this
world, humiliating us by keeping us in a
birdcage. If we can't win, we'll die.
However, we'll never win unless we fight.

進撃の巨人長

attack on gimo



SPACE HOME
DELIVERY MEMBER,
TSUBAME-CHAN.

BLACK FEATHERS

WHITE FEATHERS

ESTABLISHMENT, ETC.

SUCH AS SKETCHES.

ARUKARI, 2013.08.

RED HAIR TIP; →
REST IS BLACK.

HER BREASTS SHOW HERE.
BUT THEY AREN'T TO
HERE.

WHITE AND
RED LINES.

A CHEERFUL, YOUNG
SPORTY CHARACTER

EVEN THOUGH I DIDN'T
PUT TOO MUCH ATTENTION
TO IT, I DIDN'T MAKE IT
LIKE A PACIFIC SWIFT.

SURPRISED

SEEMS SHY.

LET'S DO A
PROPER SET FOR
THE SNEAKERS.

KNOT

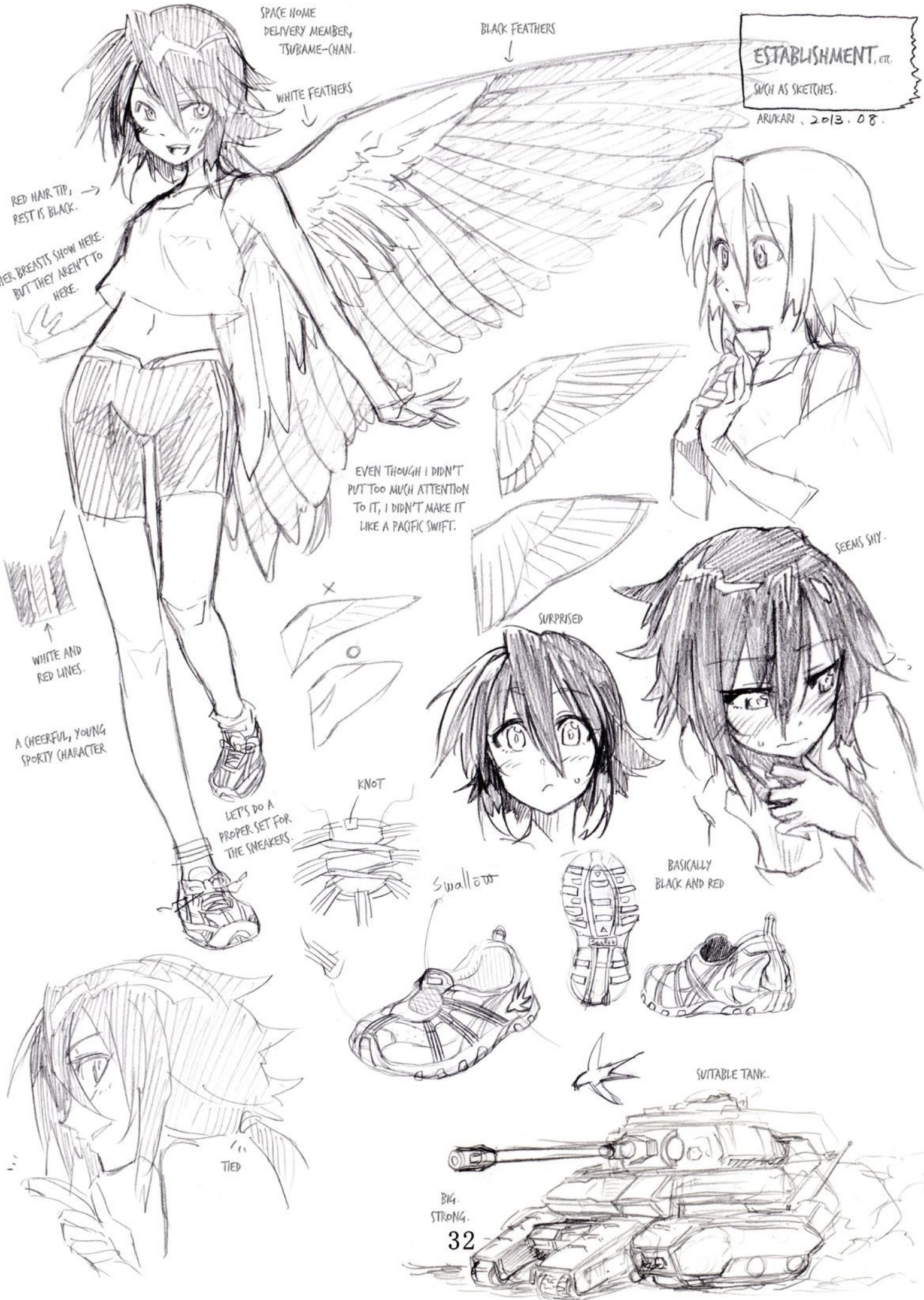
Swallow

BASICALLY
BLACK AND RED

SUITABLE TANK.

BIG.
STRONG.

32



THE TRUTH IS, I WANTED TO DRAW A PLEASANT HEARTWARMING STORY OF A SPORTY TYPE OF GIRL AND A SCHOLAR WITH A SIZE DIFFERENCE LIKE THIS, BUT I DISCARDED IT BECAUSE THERE WOULDN'T BE ANY EROTIC ELEMENTS. MAYBE I'LL DRAW IT EVENTUALLY.

Short Tale of The Swallow.

2013.8.
©arukari
futin



Ochiko Collection

Circle: Ochikonium
Representative: Terada Ochiko
Guests: Arukari
URU
Kasan no You
Kafuka
Hank
Alloyrabbit

Translation: ydnkm and tsacc

Ochiko's Nico Live Community: co467317
Ochiko's Pixiv ID: id=277281
Representative Contact E-mail: ragnarok1129@hotmail.com
Date of Issue: 08/11/2013
Do not reproduce / Do not resale / Do not upload
Printing: Sun Group Corporation

Afterword

Ochiko (Pages 4~11)

I upped the scale of Auntie compared to last time, and I think it's more erotic now.

Arukari (Pages 12~21 + 32~33)

I drew a birdgirl manga! Drawing repeatedly with a mechanical pencil is fun! I really feel that I am a person who only draws traditionally. I'll be happy if people had fun reading it! To those who read it, thank you a lot!

URU (Pages 22~23)

I was allowed to draw in Terada-san's book this time, I was happy and nervous at the same time... Since I gave my all with my own style, I hope you'll admire my girls. (◦ •ω<) ♪

Kasan no You (Pages 24~25)

I'm happy to participate in Ochikonium's new publication. I wanted to do something erotic with giant cute girls and something related to crushing and foot fetish... Sorry if I said something rude!

Kafuka (Pages 26~27)

Nice to meet you, I'm Kafuka. Hope to get along with you! That I got the chance to participate in this is an honor. I'm really grateful. Yunzo's Eliza is really kind and cute. She leaves a deep impression. I'll pray for your health. My best regard.

XNR (Pages 28~29)

I liked drawing Homura-chan for Ochiko. I hope I improved since my previous work. Thank you.

Hank (Page 30)

It's an honor to participate in Ochiko's doujin as a guest. I wanted to draw my best drawing. I hope people like it. I'll keep improving my drawing skill and I look forward to drawing together again.

Alloyrabbit (Page 31)

I'm happy to have the chance to have my work included in this doujin. I hope the Western and Eastern communities get more and more close.

